

『万葉集』と『古今和歌集』におけるオミナエシ（女郎花）

Ominaeshi in 'Manyoshu' and 'Kokin Wakashu'

半田 勝良

Katsuyoshi HANDA

（平成30年9月25日受理）

『万葉集』と『古今和歌集』におけるオミナエシ（女郎花）の要旨

人と植物との関わり方については、①実用面、②美的鑑賞面、③宗教面等のそれが想定できるが、『万葉集』時代においてオミナエシは②の側面が強かったようだ。しかもそこでは、単純な秋の一景物というような捉え方が主であった。

しかし、『古今集』時代になってくると、人々の興味関心は単純な秋の景物から新たなイメージの方に移って行く。加えて、歌語としての関心も高まっていき、個人の思いを表現するのに相応しい素材＝歌材となって行った。

その先駆けとなったのが、僧正遍照の『古今集』226番の歌である。この歌では、『万葉集』時代にわずかに感じ取れた「オミナエシ＝女・美女」という見方から外れて、「オミナエシ＝男を誘惑する女・婀娜っぽい女」といったイメージが形成されている。以後のオミナエシについての歌は、この新たなイメージのヴァリエーションの中で展開していくことになる。例えば敏行朝臣の『古今集』228番や小野美材の『古今集』229番等野原や野宿、旅や旅寝のイメージ、左大臣『古今集』230番等の浮気なイメージが作られて行く。また、物名や誹諧歌にも取り上げられていることから、俗なイメージや笑いのイメージも加えられていく。

さて、平安中期以後になると、オミナエシの関心の深さが失われていく。これはやはり、花自体の美しさではなく、様々なイメージとして親しまれてきたので、それらに対する飽きや出尽くし感等が生じてきたからであろう。いずれにしろ、多彩なイメージを作り出してきた『古今集』は存在感が大きい。しかしながら、時代が下るにしたがって「女郎＝遊女」というイメージが定着していくが、これは『古今集』が作り出した落とし子とも言える。

1. はじめに

オミナエシ（女郎花）という植物（草花）は、『万葉集』の時代から現代に至るまで、「秋の七草」の一つとしてよく知られている。その分類の始めと言われているのが、山上憶良の次の二つの歌である。

秋の野に咲きたる花を指折りかき数ふれば七種の花（巻8・1537）

萩の花尾花葛花なでしこの花をみなへしまた藤袴朝顔の花（巻8・1538）

このオミナエシが、『万葉集』とその後の『古今集』でどのように捉えられていたのか、ここではそのことに絞って探り、考えてみることにする。

まず『万葉集』であるが、この膨大な数の和歌を集めた日本最古の和歌集には、実に多くの植物が登場してくる。そのことについて、まず中尾佐助（育種学、植物学が専門）は次のように述べる。

万葉集の中には約一六六種の植物が登場する。この数は聖書より多く、世界の古典のインドの『ペーダ』、中国の『詩経』より多いようである。つまり万葉集は世界の古典の中でいちばん多くの植物名が登場するものである。（中尾佐助『花と木の文化史』108頁）

さらに、松田修（植物学、文学が専門）は次のように述べる。

ただ万葉集の場合特に考えられることは、現われている数はわずかに一五〇種にすぎないが、枕詞その他で植物と結ばれた歌が多く、万葉歌数、四四九六首の約三分の一、一五四八首は植物をよんだ歌か、あるいは植物と関係ある歌で、これは大いに注目すべきことで、また、文学的価値からすれば、万葉集くらい自然を背景にし、これをおりこんでいる文学もないといえる。（松田修『万葉の植物』142頁）

我々は、『万葉集』および万葉時代において、いかに植物と人との関係が深いかということとは直感で分かっているが、こういう指摘はその直感を裏付けるものとなっているだろう。

この人と植物の二者の関係については、①実用的な面（食用、薬用、塗料（染料）、建築、工芸、衣類用等の利用）での関わり方、②美的鑑賞面での関わり方、③宗教的側面での関わり方、等が想定できるが、特に松田は上の本では、最初の①実用面での関わりの深さについて詳述している。（加えて、大貫茂の『ハーブ万葉集—今日に役立つ植物達』は、「万葉集」で詠まれた植物の薬用、食用、染料等としての関わりが、「万葉集」の歌を通して示されていて、興味深い。）①は、正に実用的なことを要請する実生活と関連が深い。そしてそこでは、季節に関わりなく存在する草木が多く詠みこまれている。一方、②は、必然的に実生活からは遊離し、宴や贈答歌の素材として取り上げられることも多く、そこで詠まれた歌は、①と違って、季節ごとの開花が決まった花木であることが多いようだ。

また、③の宗教的側面については、植物の種類によっては、かなり有力な関係性の説明になり得る。例えば「桜」や「松」等の花や樹木と人との関係の歴史をたどってみると、そこに田の神や年神の依り代だとか豊作の祈願を占うだとかいう指摘は多い。しかし、今ここで扱うオミナエシについては、宗教的関係性の側面は比較的薄いように思われる。「秋の七草」全体としても、宗教以前に習俗の点からも関係性がはっきりしないようだ。有岡利幸は『秋の七草』という本の中で『世界大百科事典』（平凡社）の「秋の七草」の解説を次のように紹介している。

春の七草は、一月七日に七種の菜を入れて粥としてたいてたべ、長寿と幸福を祈る。これに対し秋の七草は、見てたのしむものであり、習俗の方でも七種の花をいっしょ

に神にささげるといふような行事は少なく、一つ一つの植物が別々の神の祭祀に関係をもっているという。（有岡利幸『秋の七草—ものと人間の文化史145』17頁）

しかしオミナエシについては、「神の祭祀」とはほとんど関係がないようだ。「観賞が主であり、中・東部日本では名月に供える風がある。」という簡潔な説明がこの後引用されている。

さて、そういうわけで『万葉集』の中でのオミナエシに関する和歌は、この分類で行けば③の宗教的側面は薄いような気がする。また、実用面も根に解毒作用や利尿作用があるということから、薬としての利用はなされていたかもしれない。しかしながら、『万葉集』の中のどの歌の場合もそうなのだが、実用面というのは実生活に役立てるといふ面なので、芸術的成果である「和歌」の中にそれを詠み込むというのは比較的少ない。また、実生活という面からもその点は見出しにくい。ただ、秋の景物として詠んだ歌はある。次にその辺りの『万葉集』の歌から入って行き、②の美的鑑賞面への流れをたどってきたい。その前にオミナエシの姿形（の美しさ）について、先程引用した有岡の説明があるので、取り上げておきたい。

初秋からこずえに黄色な花をたくさんつけるオミナエシは、一、二本だけでもけっこう美しさを感じさせる花であるが、本当に美しいのは大群落を形成して、野原一面黄色に彩られた光景であろう。（中略）晩夏から高さ一メートルほどの茎に、黄色い粟粒のような小花を多数つけ、わびしくゆれ動くさまは、か弱く女性的で、いまにも倒れたり折れそうに見えるが、なかなかどうして、草姿とは相違してきわめて丈夫な草である。さすが厳冬を乗り越えることができる強靱な生命力をもっている。まさに女性的な生命力の強さといつていいであろう。（前同。201～202頁）

ここからはオミナエシが群れている場合も、また一本だけの場合でもそれなりの美しさや強さを持っていることが、そういう解釈からその姿形を受け止めているということが分かる。おそらく見た目からはこのような解釈も可能かもしれない。「強靱な生命力」等と言っているのも、あるいはオミナエシのイメージの一部を形成しているのかもしれない。しかしながら、こういった見方は多分に現代的な見方、オミナエシの歴史的な見られ方、イメージの作られ方を知った上での見方のように思える。おそらく歌われた当初にはこういう見方はなく、徐々に作られていったイメージ、それをさらに現代的な感性でとらえたものなのだろう。それゆえ、この解釈からはあまり『万葉集』『古今集』の歌へは繋げにくい気がする。

2. 『万葉集』とオミナエシ

次の二首は、秋の景物として詠んだ歌ということになる。

をみなへし秋萩交じる蘆城の野今日を始めて万代に見む
（おみなえしと秋萩が交じって咲く蘆城野は今日を初めとして万代までも見よう。）

(作者未詳・巻8・1530) (現代語訳は『日本古典文学全集 萬葉集一、二』より)
をみなへし秋萩折れれ玉銚(たまほこ)の道行きづとと乞はむ児がため
(おみなえしと秋萩を折っておけ旅のおみやげはと言つてせがむであろうあの娘のため。)(石川老夫・巻8・1534) (現代語訳前同)

いずれも叙景の歌に人事的な色合いが少し混ざっている。叙景では萩と並べられて詠まれている。静かな歌である。オミナエシは強い存在感を示してはいない。

次の二首も強い存在感は感じられない。「佐紀」にかかる枕詞として使われていて、あくまで脇役である。以後主役となる女性のイメージもないわけではないが、感じ取りにくい。そのことが直接「オミナエシ」と重なっているわけではないのである。

をみなへし佐紀沢に生ふる花かつみかつても知らぬ恋もするかも
(佐紀沢に生い茂る花かつみかつても知らない恋をすることだ。)
(中臣女郎・巻4・675) (現代語訳前同)
をみなへし佐紀沢の辺のま葛原いつかも繰りて我が衣に着む
(佐紀沢の辺の葛原はいつ繰り寄せてわたしの衣にして着られるやら。)
(作者未詳・巻7・1346) (現代語訳前同)

前の歌は「花かつみ」の方が主である。しかも、その「花かつみ」(花あやめか花しょうぶの類か?)も「かつて」を導き出すための序詞である。ということは、結局この歌を内容から見れば、「かつても知らぬ」(ちっとも知らない)恋をする、ということだけになる。枕詞や序詞に使われている語句は、内容から見れば従でしかないということなのである。また、後の方も、「ま葛原」すなわち「葛」が主である。その葛をたぐって糸にして自分の着物として着ることの期待感を詠んでいて、これが早く結婚できることへの期待感の比喩のようで、巧みな歌であると思う。しかしながら、ここでも「オミナエシ」は脇役でしかないのである。

さて、次に②美的鑑賞面での関わりの方へ移って行きたいが、美的鑑賞といってもオミナエシは、「美しいもの=娘」の比喩として多少詠まれている位である。オミナエシの実際の姿形が美しくはないということではないが、「立てば芍薬座れば牡丹歩く姿は百合の花」のようにその道の王道の花という訳ではない。あらゆる花は愛され続けてきたが、その愛され方は多様である。オミナエシは主に言葉の語感やイメージから想像力を掻き立てられることで好まれ、愛されてきたと言えるだろう。その兆しは実は『万葉集』にも見られる。

そこでまず、『万葉集』の文字である万葉仮名表記を覗いてみたい。『万葉集』の中でオミナエシを詠んだ歌は十四首ある。そこで使われている表記を分類してみる。

『万葉集』と『古今和歌集』におけるオミナエシ（女郎花）

1	2	3	4	5	6	7	8	9
娘子部四	姫押	娘部思	娘部志	姫部志	佳人部為	美人部師	娘部四	乎美奈敏之
675	1346	1530 1905	1534	1538	2105	2115	2279	3943 3944 4297 4316

(1～9の番号は分類番号。3～4桁の番号は歌番号。)

見て分かるように、「オミナエシ」の「オミナ」には「娘子」「娘」「姫」「佳人」「美人」といった漢字があてられている。「万葉仮名」なので、その漢字の意味の部分は示している場合でも、比較的弱く、確定的に定着しているものではないだろう。しかしながら、「オミナエシ」について、万葉人の意識や関心の有り様はある程度は感じ取れる。当時の人々は強くないが、「オミナエシ」に「娘」や「美人」といったイメージを持ち始めていたのだろう。

次の歌では、景物に女性の美しさが重ねられている感じがし、オミナエシ自体の存在感も、前歌よりは強くなっている。しかし、以下の歌は通り一遍の歌であって、オミナエシに対する特徴的なイメージはまだ感じ取れない。

手に取れば袖さへにほふをみなへしこの白露に知らまく惜しも
 (手にとると袖までも染まるおみなえしのこの白露に散るのが惜しい。)
 (作者未詳・巻10・2115) (現代語訳は『日本古典文学全集 萬葉集三』より)
 我が里に今咲く花のをみなへし堪へぬ心になほ恋ひにけり
 (わが里に今咲く花のおみなえしに堪えがたい思いでなおも恋している。)
 (作者未詳・巻10・2279) (現代語訳前同)

3. 『古今集』とオミナエシ (I)

万葉時代においては人と植物との関係は強い。それは換言すれば二者の距離が近いということでもある。距離が近いということは、その対象を人は認識しにくいということでもあるだろう。近いゆえに分かりにくい、近いゆえに対象化(突き放す)しにくいとか、言葉化しにくいといったことである。近くて親しんでいるからそれらは和歌としても素材として取り上げるのだけれど、その場合、さほど対象化はできないはずである。取り上げはするが、そこにあれこれと自分の思いを込めるのも、しにくいはずである。(思いを述べるには距離が必要である。)

近いと対象化しにくい。『万葉集』で一番多く詠まれた萩(138首)も、おそらく対象化しにくく、その必要性もなかっただろう。野原にごく当たり前の風景として目に入るものである。言わば身内の関係のようなものであろう。しかしながら、二番目に多い梅(118首)は身内の感覚とは少し異なっている。これは外来の植物であり、万葉時代当時の先進国である中国から伝来したものである。飛鳥から奈良朝時代の宮廷人達はかなりの熱度をもって、この植物に関心を持ったであろうことが想像できる。梅は他の植物とは違い、例外的なものであった。

さて、再び「オミナエシ」に戻るが、『古今集』で脚光を浴び俄かに存在感が強くなっ

てくる。このことをすなわち今述べてきた距離感の問題で言えば、「人」と「オミナエシ」との近い距離感が変わり、距離が発生してきたということである。その結果、この「オミナエシ」に、その花自体への関心よりも、いわば「歌語」としての「オミナエシ」に興味関心を抱くようになってきた。「歌語」への関心の息吹は、既に『万葉集』のあの「万葉仮名」で記された幾つかの「オミナエシ」の表記の中に見て取ることができる。（その辺のことは既に前節でも触れた。）しかしながら「万葉仮名」は、日本語の書き言葉としては未完成の状態のものである。ゆえに、万葉時代には歌語としての「オミナエシ」への関心も、中途半端なものであった。

しかしながら、『万葉集』から『古今集』へは時間の空白が百数十年もあった。その長い間に書き言葉や語の意味の定着は完全に成されてきたと思われる。「女郎花」という字が「オミナエシ」を表す漢字として定着したのは『古今集』以後であり、そこに至るまでに「女郎」の語のイメージが、この百数十年のどこかで「オミナエシ」と接合したのであろう。

「女郎」のイメージというのは、万葉歌人の名前に見られる「○○女郎」とか「○○郎女」という名前からの連想もあるのではないか。その語の基本の意味は、辞書によれば「女性を敬い親しんで呼ぶ語」としか書いてないが、身分の高い女性のことでありそうだ。石川郎女（いらつめ）を初めとする、「郎女」、中臣女郎、笠女郎、紀女郎の「女郎」等の名はすぐに思いつく。いずれにしろ、「オミナエシ」＝「女性」＝「親しい女性」のイメージが、『古今集』時代に来て明瞭に比喻表現として示されるのである。この比喻は、新たに付け加えられ支配的になったイメージ（これを明らかにするのが後述の文章のねらいでもある）も含めて、多彩である。それも全て、「オミナエシ」という対象に距離が生じたところから、イメージの自由な遊びを楽しむようにまでなってきたと言える。

さて、『古今集』であるが、この歌集では「オミナエシ」という対象との距離が生じ、個人から突き放され、それが単なる秋の景物ではなくなり、様々な個人の思いを表現するための素材となっている。もちろん基本的にはその花への愛好や親しみの気持ちは前提にあり、それは万葉時代とは明らかに異質である。六歌仙の僧正遍照の次の歌がその先駆けのようである。

名にめでで折れるばかりぞ女郎花われ落ちにきと人にかたるな
 （名前が気に入って折っただけのことだよ。女郎花よ、この私が墮落したなどと、他人にしゃべってはいけないよ。）（僧正遍照226）（現代語訳は『新潮日本古典集成 古今和歌集』より）

この歌については、『和歌植物表現辞典』では「その後の『をみなへし』をよむ歌に大きな影響を与え続けた一首である」とあるが、この歌が「影響を与え続けた」かどうかの実証はここでは難しいが、何やら人間臭い歌である印象は否みがたい。すなわちここでは、単に女性や美人のイメージを飛び越えて、僧侶をかどわかすような妖し気な女性のイメージが登場しているのである。『古今集』は『万葉集』などと比べて、はるかに自分の思いや心を述べる歌の世界である。正にそういう点でもこの歌はかなり高レベルでその個人の思いを述べていると言えよう。古今集時代の初期の六歌仙の歌だから、後の古今時代の歌

人にも影響を与えたということは想像に難くない。

恐らく「オミナエシ」は、個人が思いを述べるのに相応しい素材であったのであろう。この後かなり自由に、思いはこの素材に向けられている。しかもそのイメージは、万葉仮名にあった「美女」はその通りであり、万葉歌人の「○○郎女」の「敬い親しんで」いることも当たっているが、それに加えて男を誘惑する女、あだっぼい女といったニュアンスが込められるようになってくるのである。

女郎花憂しと見つぞ行きすぎる男山にし立てりと思へば
（女郎花を、なんだだつまらないと、見すごして通り過ぎた。女郎花なのに、男山に立っているから…。）（布留今道227）（現代語訳は前同）

この「女郎花」も、遍照と同じく男を誘惑するような、あだっぼい女のイメージである。「男山」すなわち、「男」という名前の付く場所に咲いている、という意味合いであろう。

4. 『古今集』とオミナエシ（Ⅱ）

また、「女郎花」は、野原や野宿、旅や旅寝のイメージとも繋がっている。

秋の野にやどりはすべし女郎花名をむつまじみ旅ならなくに
（旅に出かけてきたわけではないのだけれど、今夜は、秋の野で泊まるとしよう。そこには女郎花が咲いていて、その名が親しく感じられるので。）（敏行朝臣228）（現代語訳は前同）

女郎花多かる野辺にやどりせばあやなくあだの名をや立ちなむ
（女郎花の咲き乱れる野に宿をとったら、花の名にひかれて、実際には何事もないのに、私は浮名を立ててしまうことだろう。）（小野美材229）（現代語訳は前同）

野宿や旅寝は、浮き名や浮気のイメージに通じていく。また歴史的には、道真を失脚させたので悪役に見られがちな藤原時平の次の歌も「女郎花」を男心を誘う女と見ている。

をみなえし秋の野風にうちなびき心ひとつを誰によすらむ
（女郎花は、秋の野を吹く風のまにまになびくばかりで、本当の心は、いったい誰によせているというのだろう。）（左大臣230）（現代語訳は前同）

当時、女郎花合わせ（女郎花に歌を添えて、その優劣を競う歌合）という歌合が度々開かれた（それだけ「女郎花」に対する関心が高かったということになる）が、以下はその時の歌である。

花にあかでなに帰らむ女郎花多かる野辺に寝なましものを
（花を見に来て、まだ充分満足していないのに、どなたもどなたも、なぜ帰ろうとさ

れるのでしょうか。このまま、女郎花が咲き乱れている野で、泊まりたいものですか。(平貞文238)(現代語訳は前同)

この歌に限らないが、基本的にはほとんど全てが「女郎花」には美しい女性が喩えられている。さらに、その美しい女は男を誘惑するような妖しくあだっばい(性的魅力をからだ全体から発散する)イメージを持っている。さらに言えば、ここには恋人とか妻とかいう特定の相手のイメージは見えにくい。このようなことが、近世に至ると「女郎」=「遊女」のイメージが定着するが、そこに結びついていく雰囲気は既に持ち合わせている。また、この「女郎花」は俗なイメージや遊びや笑いのイメージとも繋がっている。これも「女郎花」のあだっばいイメージと通じるものがあるだろう。

そのようなことから、『古今集』には秋歌の部立ての中の「女郎花」歌十三首以外に、「女郎花」の誹諧歌四首と物名三首も選入されている。誹諧歌というのは、様々な表現技法を意識的に使って、滑稽味を出そうとした歌のことである。それは一般的に、「女」であっても「恋」であっても、あわれに通じるような部分と、笑いに通じる部分があり得るが、それはすなわち雅と俗とも言えるが、その俗の部分が多いのも誹諧歌の特徴である。「女郎花」歌を一つ二つ取り上げてみよう。

秋の野になまめき立てる女郎花あなかしがまし花も一時

(秋の野に、美しい姿をきそってしゃなりと立つ女郎花。ああ騒がしいことだ。花期はほんの一時だというのに。)(僧正遍照1016誹諧歌)(現代語訳は前同)

秋くれば野辺に戯る女郎花いづれの人か摘までみるべき

(秋になると、野辺に色っぽく咲き乱れる女郎花。誰がこの花を摘まないで、ただ見るだけでいられようか。)

(よみ人しらず1017誹諧歌)(現代語訳は前同)

「なまめく」は「若々しく美しい、優美である」の意味もあるが、現代的な「色っぽくふるまう」という意味もある。「戯る」には「戯れる、ふざける」の意味以外に「みだらな行為をする」「恋におぼれる」の意もある。どちらにせよ、色っぽい様子とか嬌態といったようなイメージである。

これらを見てくると、やはり「女郎花」は優美、高嶺の花、高貴、雅、妻、恋人といったイメージの花ではなく、美しくはあるが、あくまで俗、滑稽、身近な花、色香、色気、誘惑する女、嬌態、浮気等に繋がるイメージであることが理解される。

さらに、「遊び」に使われている歌を取り上げる。ここでの「遊び」は「遊ぶ女」ではなくて、「言葉遊び」である。これは「オミナエシ」という語が、言わば「歌語」としても親しまれたことをよく示している。

白露を玉にぬくとやささがにの花にも葉にも糸をみなへし

(白露を、玉として緒に貫こうというのだろうか。蜘蛛が、花にも葉にも糸をかけた。)(紀友則437物名)(現代語訳は前同)

最終句の「糸をみなへし」は「糸を皆綜（へ）し」と「をみなへし」が掛け合わされている。このような「言葉遊び」を「物名」と言うが、それはこのように、与えられた題（この歌の場合は「をみなえし」）を隠して詠む技法である。「をみなへし」の「物名」には「折り句」という技法の歌も入っている。

小倉山[、]峰[、]たち[、]なら[、]し[、]鳴[、]く[、]鹿[、]の[、]経[、]に[、]け[、]む[、]秋[、]を[、]知[、]る[、]人[、]ぞ[、]な[、]き
（小倉山の峰を歩きまわって、鹿の鳴く声が聞えるが、あの鹿は、いくたび秋をあのようにして過ごしたのか、知っている人はない。）（紀貫之439物名）（現代語訳は前同）

「折り句」は、隠し題の一つで、和歌では各句の初めに物の名を置いて詠むものである。上の歌では、傍点部分の五箇所になる。ただし、上の歌は漢字交じりなので、正確ではない。仮名の五箇所、すなわち仮名の五文字が正しい。

このように「誹諧歌」や「物名」に幾つか選入されているということは、やはりそれだけ「女郎花」が俗的、あるいは俗語的イメージを喚起するものであるということの証明となっていると思われるのである。

さてこの「女郎花」は、平安時代前中期においてはこの『古今集』を初めとする勅撰集や『源氏物語』『紫式部日記』『枕草子』『十訓抄』『和漢朗詠集』等に取り上げられ、関心の深さが見られる。しかしながら、時代が下るにつれ勅撰集への選入も減少の一途をたどり、人々の関心が薄れて行った。そういう意味では、女郎花という花は相変わらず昔と同じ様に咲く訳だから、オミナエシ自体を急に遠ざけてしまうのも理解しがたい。このことは恐らく、時代とともに花にまつわる様々なイメージに対する飽きからくるものであろう。そもそもこの花は、もともと花自体の美しさに親しまれていたのではなく、イメージ（しかもそれは言葉から喚起されるイメージ）として親しまれていた。そのイメージがほぼ消費され尽くしたということかもしれない。そう考えれば、そういうイメージの花を多彩に咲かせる要になった『古今集』は、その存在意義がとても大きかったということに、改めて感心するのである。加えて言うならば、「女郎」＝「遊女」という新しいイメージの定着も、『古今集』からの一種の落し子なのかもしれない。

引用文献・参考文献

- 『日本古典文学全集 万葉集一～四』（小学館）
- 『新日本古典文学大系別巻 万葉集索引』（岩波書店）
- 『日本古典文学全集 古今集』（小学館）
- 『新日本古典文学大系 古今集』（岩波書店）
- 『新潮日本古典集成 古今集』（新潮社）
- 中尾佐助『花と木の文化史』（岩波書店）
- 松田修『万葉の植物』（保育社）
- 大貫茂『ハーブ万葉集—今日に役立つ植物達』（誠文堂新光社）
- 有岡利幸『秋の七草—ものと人間の文化史145』（法政大学出版）
- 『世界百科事典』（平凡社）

- 『和歌植物表現辞典』（東京堂出版）
- 『万葉植物事典—万葉植物を読む』（北隆館）